

## 第10の岐路・弁論大会

私の師範入学に移る前に、小学校時代の思い出として、どうしても記さねばならないと思われる一事がある。それは例の石川唯一先生のお力添もあって、今で言う「弁論大会」のような際には、必ず選ばれて全校生の前で、毫も臆するところなく弁論をやったことであって、これはひとり石川先生の担任の時だけではなくて、その後二人の担任の先生の時にも同様であった。思うにこの点については、ある程度祖父の隔世遺伝もあるかもしれない。そして今一つ感謝に堪えない一事は、郡内一の大規模の半田尋常高等小学校における4年間の成績の順位は、常に首席であったことである。というのも、私の同級生の中には、当時多額納税議員有資格ないしは、それに準ずる富豪の子弟が7、8名もいたから、その中にいて一小作農の貰われ子など、全く「そこに居るか」とも思われ<sup>びよう</sup>ない眇たる存在であったが、公平にも成績順位に公表せられし事は、後年私がジャーナリズムはもちろん、学会にも全くな名のままに、今やその一生を了えんとしているにもかかわらず、根本には毫末も動揺なく、その歩みを貫くことが出来た根本信念は全くここにその基礎を与えられたかと思われるわけである。すなわちどこかで神天は見ていただいている…との観念を深く与えられたが故である。(最もそうした中でよく首席であった事は、祖父の社会的地位…当時半田の富豪階級はいずれも祖父の知人であった、日比の伯父はその娘婿であったためである。)